きびのさと

NO.56
月刊

第二輯 宮祠篇 第一号
昭和廿八年二月一日 発行 （非売品）
発行所 岡山県都窪郡吉備町東所一二五 宇垣方
吉備観光協会

○

三王宮

中撫川の上符の田園中にある。一間四面の堂のなかに一小祠を置いている。本額に「三王宮」とあり、宮の前には四五糎に三〇糎の長方形の手水鉢に「当村 太田常治 太田宇八」「建之」の銘がある。創建のほどは不明であるが昔から信域寺の奉仕に従えば、昔このあたりは古戦場になっている。祭神について古老の説に、一人の武士が腰を痛めて休んでいる所へ敵兵が迫り、討死した場所と、いわれ、その武士の霊を弔ったという。思うにこの附近は永禄、天正の交に三村、宇喜多両軍の争った芝場城の戦と、羽柴、毛利両軍の交戦した高松城水攻の時の旋瀬城の戦の両度行われているので、彼我の間に相当の死傷者があったことは想像せられるが、この人物が如何なる武士か、またいづれの合戦の時のものか、もとより知る由もない。後世この宮に念ずると腰より下の病に霊験があると信ぜられ、参詣するものが多くついに堂を建てて内部に腰かけをしつらいて便じた。

三王宮という名の起りは、御霊の轉訛したものではなかろうか。

出雲大明神宮

本町の高畠家屋敷内に鎮座する一小祠にして、祭神は出雲大社の分霊を勧請し高畠家の鎮守に祀ったのである。御本体は縦二〇糎、横一一糎の板碑に「南無妙法蓮華経 出雲大明神」。裏に「于時慶應第二庚寅年仲秋念五勧請之、精神庵主 恵長 日久欽白」とある。

出雲大社は島根県杵築にある有名な神社にして、祭神は国土を経営された

大国主命である。神話によれば天神、高皇産霊尊は武甕槌命、経津主命を大国主命へ遣わされて葦原の中ツ国を皇孫に譲るよう申された。大国主命は御子の事代主命と相談なされ、潔よく国土を奉って杵築の地に宮居して隠退された。これが今の本社の起源である。

命の名は大穴牟遅

これが今の本社の起源である。

善神京色許男

八十神たちのうちで最も美貌の神であったし、また氣質の優しい方であったので女神にもてはやされていたので、後世縁結びの神として若者たちに敬慕される神である。其の他国譲りや因幡の兎などの神話は周知の事と思ふ。仏教が渡来して仏道でいう、大黒天と混同して一般に福徳神と崇め、人生の幸福を祈るのである。また事代主命を恵比須様というのである。

人間は誰しも幸福を願はないものはないが、その幸福には種々雑多な考へかもつているのである。貧乏人は金持ちになりたいと希ひ、金持ちは名誉や地位が欲しくなるのが幸福と思っているらしい。物質的の欲望にかきたてられて邪まな道を辿って賊を積み神社や御国に寄附した處で、その幸福は真実でもなければ信望にもならない。

日幡宮と留霊宮

庄村大手の日畑古城跡の東南、山禁に二つ列んでいる小さなお宮である。いづれも古社にして日幡宮の祭神は吉備津彦命の随神大養建命を奉祀していたが昔大飼家の先祖が新郎に数十町歩の土地を私有していたので、ここに祭神を遷し御崎神社と奉祠していたが、更に明治四十三年五月に県の指令で社殿全部を宮内の吉備津神社へ遷祀した。神池の弁天島に鎮座する宇賀神社がそれである。

新郎の田社地は境内半分東は粘土質にして、西寄りは山土である。先年老松の根元を堀ったところ石器時代の遺物や弥生式土器の破片を発見したことがある。またこの地の大飼某が土中から鎌倉期と推定される茶碗一個

を切り出したこともある。中世期頃には人がここに住居していたのではないかと想像せられる古い土地である。

御埼神社遷祀の時に発見した棟札に

「維時有醜養狐作怪者　屢令誤御軍之小隷也　兄向志削之　念而伐醜虜之
営　犬又従焉彼虜　彼欲為妖　犬勇駆給咬噬　其狐兄向志立刺殺　其卒
依改名賜犬養健　後庁岡山狭智　曜庁岡多計留　故号東之建　其祠初社
于庁岡山之東南岬　後移東号新荘（郷）是時合祀于温羅之猶古墟（存小葉
極日幡祠矣（部字郡日畑村字七手前）」

日幡祠日之幡祭社」

とある。この書は應永年間のものと傳えられている。應永は南北朝の統一した室町幕府の初期にして、吉備津宮の再興した同じ年である。この書は現代文に要約して外ると

吉備津彦命の軍が庁岡山に布陣して北方に居る温羅の軍と對峙していた時に、憎むべき敵兵は狐を使って怪しい行動をし、屢皇軍を惱ました。皇軍の部將兄向志（えこし）はこれを聞いて憤り　犬を率いて敵の陣営を襲ったが、狐は屢妖しいわざをあらわしたので、犬は飛び掛かって狐を倒した。兄向志はこれに乗じて立ちどころに刺し殺した。その功によって兄向志は改めて犬養健（たける）の姓を賜はった。庁岡山の様子をよく知っていたので、庁岡多計留（たけるとは猛しき男）ともいう。また東山に住していたので、東の健ともいう。犬養健を祭る祠は、初め庁岡山の東南に当る海浜に迫まった岬に建てられたが、後ちに東の新荘に移し奉った。この時、互族協和の精神に基いて敵將温羅の霊を永久に弔ふため合祀した。その古墟は禁にあり日幡の祀と稱し、日の幡を御神体として崇め奉った社である。

（兄向志「えこし」と読む。兄は兄弟「えと」の「え」にして年上をいう。命は弟の稚武吉備津彦命と共に

吉備の地（下向になったのである。「こし」とは三重五重の塔。或は二階三階の家屋などの重層を層（こし）という）。即ち家系の序列を意味するものである）。また狐や犬が活躍したことが書いてあるが、常識上あり得るものではない。昔は元てして神話的に書分れている。古事記などの初巻には神がかり的の記事が散見せられる。これは寺院の縁起書にも多くみられる處である。現在でも町の無頼漢を「町の狼」といい、警察の手先に働くものを「警察の犬」という。或は大東亜戦争に南洋のジャングルで機敏な行動をした「特兵に対して「ジャングルの狼」などという、如きものであろう。兄向志は第一線の勇猛部隊を指揮した部隊長と考えられる。要するに偉い人物を崇拝せしめんがために、神に祭り上げる手段であったと思われる。

また御埼神社の縁起書に

備中国賀陽郡真金村字新荘金真座　所祭　真赤猛之加美　犬養健神
宇茲香比古神　温羅神

犬養健神　初名兄向志　吉備津彦命軍　於庁岡山之時　衆々森彦命
卒子　古名健之軍　而石屋山　既橋温羅及諸醜虜之　後会飲庁岡山矣
足特暴風忽至　所建於岩柱之紅錦幡　被飛而似火飛也　衆皆競逐之
終止于東南之可矣　号其地火幡　即犬養健取次奉焉　宇茲香比古
真赤猛従之　兄向志住東山也　削大命下向於針間　而以典栗坂之名
方古名俱奉迎矣　数千安藝川之東也　兄向志有所養之犬也　常陸而
従軍。要約すると

吉備津彦命の皇軍が庁岡山に陣する時、衆々森彦命が名方古名健の軍を率いて石屋山に陣する温羅及び諸賊を撃ちて大勝の後ち、庁岡山で会飲された。この時暴風が起って岩柱に建てていた紅錦の幡が風に煽られて、恰度大の飛ぶようであった。衆は皆な競ってこれを逐い終に東南の麓に止まった。よってこの地を火幡という。即ち犬養健がその幡をとって命に奉った。この時宇茲香比古、真赤猛が従った。みて兄向志は東山に住していたが、命が針間（播磨）に下向された時に、大命を削き栗坂の名方古名とともに部下を数千率いて安藝川（血吸川）の東に迎え奉った。

兄向志は犬を養育し、常に従軍の時に卒いて軍功をたてた。
　この縁起書は前の棟札よりも後世の作で相当年代がかけ離れているようである。しかしこれ等を綜合すれば、日幡宮は紅錦の御幡(のぼり)を御神体として犬養健也神を祭祀したに始まり、地名もこれに因由するものと考へられる土地柄である。
　日幡宮に列んで右に苗霊宮がある。吉備津彦命の臣、栗坂苗霊臣を祭る古社である。昔から矢尾家の鎮守として祭祀してきたが今は岩蔵神社へ遷祀した。この地に矢尾姓を名乗る家が数軒ある。苗霊臣は矢尾家の遠祖と伝える家筋で、天正年間日幡城廢絶の後ちこの地方を拝領していた旧家である。
　吉備津彦命が征服したという温羅(第四輯戦争篇吉備の合戦参照)は正史に載っておらず全く地方の伝説的架空の人物にしている。そして温羅は太古大陸方面から渡来して新山に鬼城を築き、吉備地方を掌握していた獰猛な鬼賊としているが、この地方には温羅神として祭祀する宮が多く、その名が遺っていることから判断して偉い豪族であったと思われる。大和朝廷建国の創業時代に独立精神を堅持し協力せず、どこまでも皇軍に反抗し続けて、ついに滅ぼされた実在の人物ではないかと思う。仏教経典などを繙くと印度の神様の名に阿修羅、羅漢、婆毘羅　鉢羅　沙羅　陀羅　迦毘羅など数多くの羅のついた名前が出てくる。おかしな話だが、この温羅(うら)の名と何か似通ったものを感ずるのである。
　新山の山巓にある城址をみるに、往昔人類が争山に備えて構築された素朴な石がきは、如何にも当時の豪壮さを思はすものがある。

○

荒神宮(中島)

中撫川の中島にある一小祠である。境内は十坪ばかり、祭神は高さ三〇糎木造にして顔面が三面に刻まれている三宝荒神の立像である。

華表に「天保四癸巳年八月吉日　氏子中」とある。また傍に高さ七三糎の無縫塔二基に地神、牛神とあり。その右に高さ三五糎の石碑に「龍宮海神社」の文字が刻んである。手水鉢の石面には「漱水、明治廿九年申二月
施主　氏子中」。として数名の寄進者の氏名がみられる。
　石がきの銘に、(右から)

西向　難波六治郎
半間　坪井五八
同　嶋村平太良
寄附　徳芳村壱間　小池唯治
狭川　森本惣平
同　山口亮平
弐間　袖岡新介
壱間　袖岡小三郎
同　袖岡庄五郎
半間　三宅忠平
下撫川　壱間半　岡政治良
同　荒木兵治良
半間　荒木傳造
壱間　難波久米吉
同　難波伊三郎

半間　荒木利七
同　難波八右エ門
同　中島久平
定杭　三間　難波定五郎
壱間半　難波午蔵
同　難波藤作
半間　坪井万吉
同　平川多吉
西向　壱間　難波常造
同　難波喜代造
半間　次田右エ助
大橋　壱間　曽我磯助
同　金光定吉
半間　難波利平
同　難波政五郎
同　木下傳蔵

中島　弐間　太田萬吉
壱間　森小三郎
同　太田嘉一
同　太田桂治良
同　平松繁右エ門
半間　太田芳松
同　太田又吉
同　太田八造
同　太田五良平
同　平松栄治郎
同　松本芳蔵
同　佐藤興吉
同　中島庄吉
世話方
下撫川　壱間半　荒木岩太郎
半間　荒木興四郎
定杭

同　荒木彌五郎
同　平川源吉
西向　壱間　児島忠造
大橋　壱間　荒木幸治良
同　内田利吉
中島　同　太田菊治良
弐間　太田三造
同　太田石蔵
明治十年丁丑五月
建焉
と刻んでいる。
　荒神というは教法、寺院を守護する神様で、三宝荒神のほか小鳥荒神、忿怒

荒神、夜叉荒神などがある。荒神は荒魂を祭るもので、古來害悪を発して凶をなすものとして我国では祭らなかつたが、仏教が渡來してから、印度で行はれる悪神（夜叉、羅刹）を祀つて守護神にする風習が傳つたのである。三宝とは聖徳太子の定められた十七條の憲法のなかに、「篤く三宝を敬へ、三宝とは佛、法、僧なり」とあつて崇詞である。夜叉荒神または念怒荒神は念怒の相をなすのでその種があり、小鳥荒神は小鳥法師の感應による神である。後世に至つて不浄を忌む神様とされ、各家毎に清浄にしなければならない厨房へ神棚を設けてこの神を祭るようになつた。

○ 稲荷宮（新町）

真言宗観音院の南裏、新町の路地にある。赤い鳥居を潜ると「稲荷宮」の額をかかげたお堂がある。左は堂守の住まいである。手水鉢には「明治十九年五月吉日」「荒木万吉、武市、お市、お亀、お花、お熊」の寄進者の名前が石に刻んである。堂は三間四面にして正面には「正一位稲荷大明神」の扁額があつて中央に六〇糎四面の宮造に御本体を安置している。神鏡は直径一五糎にして「木村肥前守吉政」の製作であるが、奉納の年月は不明である。両側には眷族の狐の石像がある。銘に「天保十四年、早島商人中」とあり、堂内に額三面があるが、二面は文字不明、一面には「御願目壱部、願主備前国万成村　亥歳男」と書いて、半紙に御願目の六字を認めとなく書きならべた綴帳をかかげている。

この稲荷の勧請は不明であるが、昭和の初年に堂宇が破損したので、信徒のものが浄財を募つて大修理をした際、古い棟札が発見された。それに元禄の年号があつたということであるから叛逆はその時代と思はれる。藩政時代から霊験あらたかなといわれ、参詣するものが多く、殊に商人の間に信仰が厚かつた。修理の時早島の三笠屋何某の援助を仰いだという。

稲荷と申す神様を祭る宮は如何なる山間僻地でもみられ、一般庶民に親まれる人気の神様である。江戸の中世期頃から隆昌し　街々に或は各家毎に稲荷を祭るようになつた。初午には子供は狐の面を着て、太鼓や笛で賑かな祭礼が行はれる。初午（旧二月）を祭りに選んでいるかというに「今昔物語」に、きさらぎの初午の日は、昔より京中に上中下稲荷ありて人稲荷詣とて、あつまるなり。とあつて余程以前から行われていたようである。思ふにこの季節は陽春に向ふので定めたのではあるまいか。上中下稲荷とあるは、昔は稲荷に位階を授けていたらしく、いまは一様に正一位稲荷大明神の幟りを社頭にたてるようになつた。

稲荷の語源は「倭訓栞」によると、神代、保食神の腹中に稲が生えたので、稲生（いなこ）の義から（いなり）となり稲荷の文字をあてたものである。起りは元明天皇の和銅年間に山城国伊奈利山に秦氏の長者伊呂具ついろぐというものが富貴にまみせて次第に増長し、一日餅を的にして弓を射古していた。するとその矢が的に当ると、その餅は白鳥に化して空高く飛び去ったので、ここに初めてその罪を後悔して、稲の神を祭ったというのである。そして後世須佐之男命の御子である食稲魂命（うけみたま）を五穀の神として季節に祀ったという。元来農業を建国の基礎としている我国は初め農家に非常な尊敬を受けていたのである。稲荷の宗家ともいはれる伏見の稲荷神社附近には昔狐が沢山住んでいて往々社前に出没していたが、昔から狐は不可思議な獣物としていたので、稲荷神社の眷族と呼ばれるようになり、更に狐は魔性のもののように考へられ、つひに稲荷の信仰と狐の迷信とが結び合つて人間の心の弱味に深く食い入つたものであろう。そこで鉱山師、呪行師さは待合、料理店などの人氣商売が白狐を祭るのである。以上は神道的の説であるが、佛道では、弘安十二年に智証大師が熊野参詣しての帰りに紀伊国石田河のもとで、稲羽の里にさしかかつた所、一人の老人と二人の女が稲を荷いでいた。その三人は仏の化身であつたので、稲荷大明神として祭つたとう。また本地垂跡の説によつて茶枳尼天（だきにてん）という印度傳来の神と、この稲荷と狐とを混同して祭り上げたのである。社前に朱塗りの鳥居をたてるのは佛道から起つたもので「大日経疏」に、茶枳尼天は人間の子を殺して喰ふていたので「イケニエ」の血をあらはしたものである。（イケニエとは生きた獣を贄として神に供へる昔の祭事である）。

○

若宮大明神　（坪井）

坪井部落から百米ほど距てた樹林中に若宮様という祠がある。祠前の石柱に「大正三年十一月三日　氏子中建之」とある。

御神体は高さ二・〇糎、右手に扇子を持った束帯姿の色彩を施した木造座像である。傍に高さ一二糎の神像があるが、殆んど形態をとどめざるほどに腐蝕している。また別に創酢醤の紋様を附し、表に「若宮大明神」、裏に「宇喜多柴太郎基家」と刻んだ古い位牌と、白木の古い位牌がある。白木のものは表面の文字は埋滅して全然判読しがたいが、裏面に明和六歳己丑六月吉日」の文字がかすかに読まれる。

この宮は一説に吉田五良右衛門尉を祭るとも傳えている。五良右衛門尉は坪井五良兵衛光清と共に宇喜多氏の軍に従って文禄の朝鮮の役に出陣し戰傷で片眼を失い、死後ここに祭り後世眼病に霊験があると信ぜられて参詣するものが少なくないという。坪井部落には吉田姓を名乗るもの数軒あり、その末葉として歳次祭祀している。

思うにこの宮は吉田氏の先祖が仕へた備前の国主宇喜多氏の一族、柴太郎基家（陰四輯戰争篇蜂須賀の合戰参照）が戰死後、田恩に酬いるためにその霊を祀り、若宮大明神と崇め奉ったが、後ちになって吉田氏の後裔がその先祖である五良右エ門を合祀して氏神にしたのではないかと考えられる。吉田五良右衛門尉という人物は、永禄十一年の夏、芳賀安清というものに殺害されたことは前に記述した通りで、朝鮮の役はこれから世余年後である。この五良右衛門尉とは同一人ではなく、二代目ではないかと思はれる。庄村に遺る傳説に平安朝の末頃、この地方を萬寿庄といった時代に東庄（いまの東あたり）に吉田采女正兼政という領主が住まい、その家臣に坪井右京進と坪井左馬介という二人があった。当時盗賊が出没して領内の農民を苦

しめていたので、賊を滅ぼして平和は取り戻したが、その怨霊の祟りで吉田、坪井の両家はまもなく子孫は絶えてしまった。地名として遺っている城ノ内は周囲に堀をめぐらして居り、これが往昔の吉田氏の館趾と伝へ近くに采女正兼政を祀る吉田宮という小さな祠がある。またこの附近には右京進、左馬介と呼ばれる地名も存している。この巷説によれば坪井に傳はる坪井城主坪井左京之進とか、或はその臣吉田五良右エ門尉などと、なにか関連があるのではないかと考へられるが、詮索すべき資料はない。

この若宮様から五十米ほど雑木林の細道をわけていくと稲荷宮の一小祠がある。祠前に高さ一四五糎の岩石の上に孔を穿ちて軸石から上部の長さ一六五糎の石灯籠をはめ込んで建てられている。その銘に

一奉納　寛政十乙未年　浦野孫一兵衛思明し。

と刻んである。

浦野氏は陸奥国伊達郡第川の出にして、寛文年中に孫一兵衛が備中に浪流し初めて板倉氏に仕官し文化二年八月十三日病に罹って七十四才で没した墓は西花尾の大塚山にある。この祠はもと浦野氏の屋敷（そのあとは西城九の山陽線踏切を北へいった左側でいま田圃となる）内の鎮守であったが、慶藩後部落民の要請によってここに遷祀したものである。（第九輯系譜篇浦野氏参照）

御堂建立寄進者名に

庭瀬町

一円五十銭　鈴木繁太郎
一円　野崎宮治
一円　安原又五郎
一円　中山万吉
一円　川野屋
五十銭　中山常太郎
五十銭　森又一
二十銭　坪井重太郎
三十銭　高木吉次郎
二十銭　西村孝雄
十銭　広井貞吉
十銭　佐藤宇吉
一円　吉田里吉
撫川町
一円　平松茂吉
一円　河内第二郎
五十銭　河内源次
大正十三年四月寄進
その他妹尾福田の名前があるが省略する

（おわり）

エバーソフト　寝具一式
中山ふとん店
吉備町本町・電二五